

第4章 考察

本章では、対象として収集した論文を、「掲載誌」と「年度」における数の変遷から、「観光論」全体の傾向を把握する。次に、「観光論」における「環境の概念」の傾向を把握する。そこで、使用頻度として統計的記述量に変換された「環境の概念」の各項目について、各分類および3区分した年代ごとにその変遷について考察をおこなう。

4-1 「観光論」における「環境の概念」の傾向

まず、集計したデータを掲載誌、年度別に単純集計する。次に基準である「環境の概念」の各項目について使用頻度による集計をおこなう。

4-1-1 論文全体の概要

まず、前章で集計したデータを、掲載誌、年度別に以下の図のように集計したものに対して考察をおこなう。

4-1-2 論文全体の傾向

(1) 掲載誌

掲載誌において APTEC、大阪明浄、立教の掲載数が少ない。

これは、大阪明浄は開学が2000年と新しいことがあげられる。また、立教においても、学科自体は1967年に設置されているが、紀要が発行されたのは、1998年に観光学部への改組後である。したがって、これらは全体としての量は少ないが、2～3年の掲載量であることを考慮すると、教育機関であるがゆえと考えられる。また、APTECは懸賞論文であるが、佳作は要旨のみの掲載であったため、対象とできなかった。そのため全体の量が減少したと考えられる。

(2) 年度別の傾向

1987、1989、1991、1993、1994年は、論文数が少ない。これは、対象とする

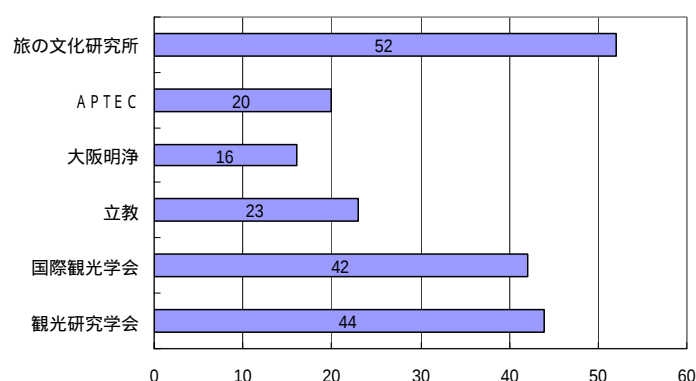


図 4.1 論文集ごとの論文数

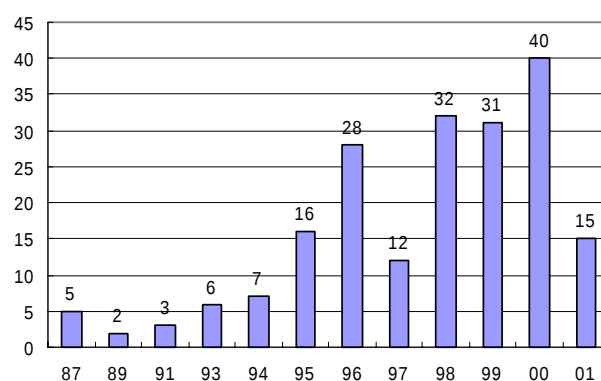


図 4.2 年度別の論文数

文献が、1987、1989、1991 年は「観光研究」のみ、1993、1994 年が「観光研究」と「国際観光学会誌」の2つであったためと考えられる。さらに、全体的に論文数は増加傾向にある。しかし、1997 年は12 本、2001 年は15 本と減少している。この理由としては、以下のとおりである。まず、1997 年は旅の文化研究所の論文発表がなかったためである。また、2001 年は、収集段階の2001 年10 月以降に、論文集が発行されるものがあるからと考えられる。

4-2 年代の区分と使用頻度の定義

4-2-1 年代の三区分

全体の記述個数において、1987 年から1995 年まで、1997 年の記述個数が少ないこと、1996、2000 年が記述個数の最大値をとる傾向があることをふまえて、1987 年から2001 年を3 区分する。まず、1987 年-1994 年を第1 期、1995 年-1998 年を第2 期、1999 年-2001 年を第3 期とした。さらに、論文数および記述個数は、第1 期の合計が16 本、197 個、第2 期が86 本、419 個、第3 期が96 本、787 個とそれぞれなった。

4-2-2 使用頻度の定義

項目ごとの記述個数の使用頻度による比較および考察をおこなうために、本研究における使用頻度は以下のような式であらわす。

$$\text{使用頻度(回)} = \frac{\text{記述個数(個)}}{\text{論文数(本)}}$$

4-3 「環境の概念」の項目における各分類に関する考察

このようにして、三区分された期間における各項目の使用頻度と項目の分類によって、観光論が環境の概念をどのように扱ってきたのかに関してとらえる。またこれ以降の表における単位はすべて回数である。

4-3-1 大分類の分析項目による使用頻度の比較

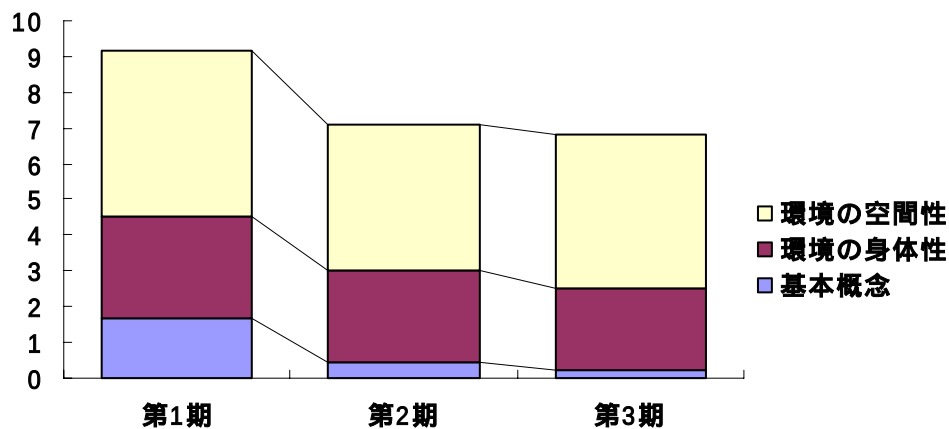


図 4.3 大分類における使用頻度の変遷

(1) 基本概念

基本概念に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期かけて、極端な減少傾向にある。さらに第3期における使用頻度の減少傾向に、変化は見られない。

(2) 環境の身体性

環境の身体性に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、値は変化しておらず、安定しているといえる。

(3) 環境の空間性

環境の空間性に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、値は安定しており、さらに大分類の項目のうち最も高い使用頻度であった。

(4) 大分類の分類項目に関する考察とまとめ

大分類において、以下の二点があげられ、これについて考察をおこなう。

- (a) 基本概念の第2、3期における極端な減少
- (b) 環境の空間性における全体的な使用頻度の高さ

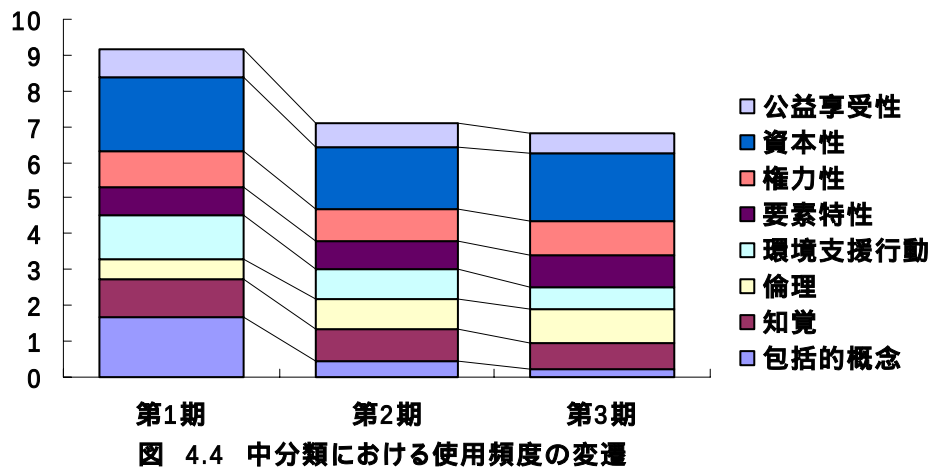
(a) 基本概念の第2、3期における極端な減少

観光論は、基本概念をその形成期としての第1期において、環境の概念を取り扱おうと試みたが、第2期、第3期と時間が経過するうちに、その取り扱いが困難、もしくは時期早焦であったと考えられる。したがって、基本概念は観光論におけるブームとしてとらえることができる

(b) 環境の空間性における全体的な使用頻度の高さ

観光論は、環境の空間性との結びつきがよいと考えられる。また、観光論は、環境の空間性に関する項目を中心に取り扱いってきたと考えられる。

4-3-2 中分類の分析項目による使用頻度の比較



(1) 包括的概念

包括的概念に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、極端な減少傾向にある。さらに第3期における使用頻度の減少傾向に、変化は見られない。

(2) 知覚

知覚に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、値は変化しておらず、安定しているといえる。

(3) 倫理

倫理に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、増加が見られた。さらに、第3期の使用頻度がわずかに増加している。したがって全体的に増加傾向にある。

(4) 環境支援行動

環境支援行動に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、値は変化しておらず、安定しているといえる。

(5) 要素特性

要素特性に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、値は変化しておらず、安定しているといえる。

(6) 権力性

権力性に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、値は変化しておらず、安定しているといえる。

(7) 資本性

権力性に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、値は変化しておらず、安定しているといえる。
しかし、中分類における項目の中で最も高い使用頻度である。

(8) 公益享受性

公益享受性に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、値は変化しておらず、安定しているといえる。

(9) 中分類の分類項目に関する考察とまとめ

中分類において、以下の2 点があげられ、これについて考察をおこなう。

- (a) 倫理の第 2、3 期における増加傾向
- (b) 資本性の使用頻度の高さ

(a) 倫理の第 2、3 期における増加傾向

中分類の項目全体に使用頻度の変動が見られないなか、倫理が第 2、3 期において、増加傾向にある。これは、観光論は、他の項目よりも倫理に関して、時間が経過してから扱いはじめたと考えられる。

(b) 資本性の使用頻度の高さ

中分類の項目全体の使用頻度が高いなか、資本性が他の項目よりも群を抜いて高い。これは、観光論と、資本性の相性のよさだけでなく、資本性は、観光論の基盤となっていると考えられる。

4-3-3 小分類の分析項目による使用頻度の比較

小分類の分析項目に関する使用頻度を比較するために、すべての項目を一度に比較することは困難である。したがって、中分類の項目に属する項目間において使用頻度の推移を比較する。

■ 包括的概念

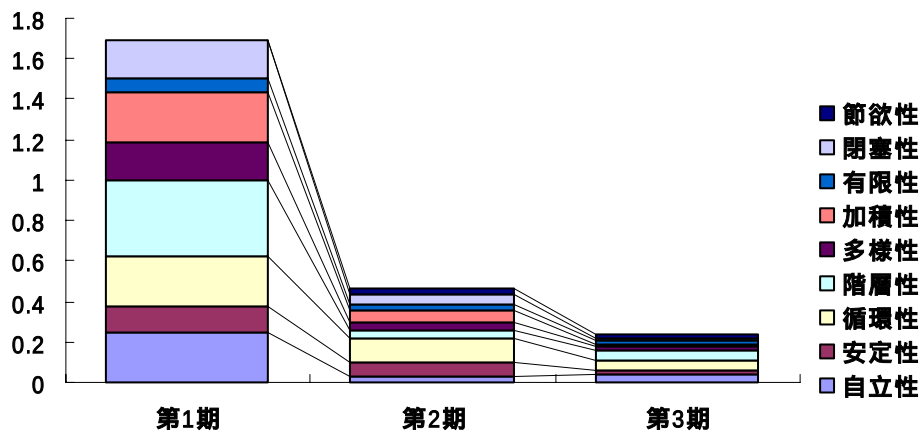


図 4.5 包括的概念における使用頻度の変遷

(1) 自立性

自立性に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、極端な減少傾向にある。しかし、第3期において、使用頻度は、わずかであるが増加している。

(2) 安定性

安定性に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな減少が見られた。さらに、第3期の使用頻度が大きく減少している。

(3) 循環性

循環性に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな減少が見られた。また、第3期には、その使用頻度が大きく減少している。しかし、包括的概念の中では、その変化が、最も安定しているとみることができる。

(4) 階層性

階層性に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、極端な減少傾向にある。しかし、第3期において、使用頻度は、わずかであるが増加している。

(5) 多様性

多様性に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、極端な減少傾向にある。さらに第3期でも使用頻度の低さに、変化は見られない。

(6) 加積性

加積性に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、極端な減少傾向にある。さらに

第 3 期でも使用頻度の低さに、変化は見られない。

(7) 有限性

有限性に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、低い使用頻度であり、大きな変化は見られない。

(8) 閉塞性

閉塞性に関する項目の使用頻度は、第 1 期から第 2 期にかけて、極端な減少傾向にある。さらに第 3 期には、記述が見られなくなった。

(9) 節欲性

節欲性に関する項目の使用頻度は、第 1 期においては、記述が見られなかった。さらに、第 2 期に使用頻度が、わずかながら出現するものの、その値は低く、第 3 期も変化は見られない。

(10) 包括的概念に関する考察とまとめ

包括的概念において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

(a) 循環性の安定度

(b) 第 3 期における自立性、階層性の増加

(a) 循環性の安定度

時間を経過するにしたがって、ほかの項目が大幅な減少しているなか、循環性の使用頻度は、最も変化が少ない。したがって、最も安定していると考えられる。ここから、観光論は循環性を、基本概念のなかで最初に扱ったということがいえる。

(b) 第 3 期における自立性、階層性の増加

時間を経過するにしたがって、ほかの項目が大幅な減少しているなか、第 3 期において、自立性と階層性のみが、増加傾向に転じている。さらに、(a) で、観光論は、循環性からとりあげていることから、次に自立性と階層性に拡大したと考えられる。

■ 知覚

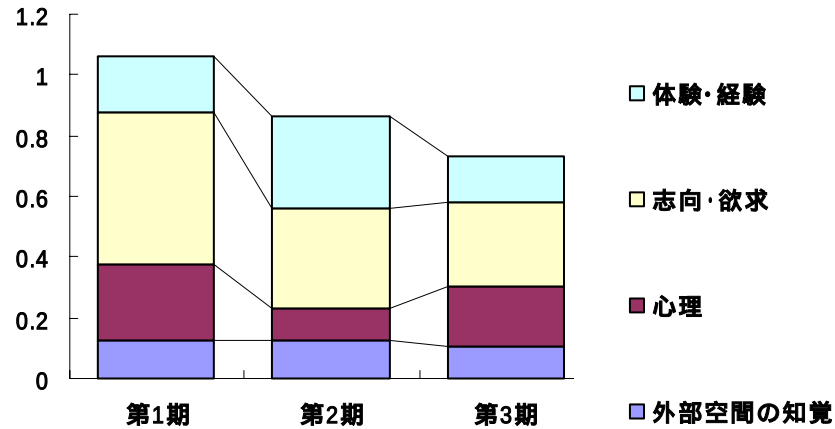


図 4.6 知覚における使用頻度の変遷

(1) 外部空間の知覚

外部空間の知覚に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(2) 心理

心理に関する項目の使用頻度は、第2期にその値が減少しているものの、第1期と第3期の値は大きな変化はない。

(3) 志向・欲求

志向・欲求に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな減少が見られる。さらに第3期でも使用頻度は減少している。

(4) 体験・経験

体験・経験に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、増加している。また、第2期において最も高い使用頻度であった。しかし、第3期には使用頻度は減少している。

(5) 知覚に関する考察とまとめ

知覚において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

(a) 志向・欲求の使用頻度の高さ

(a) 志向・欲求の使用頻度の高さ

志向・欲求は全体的に減少傾向だが、その使用頻度は知覚の項目の中で最も高い。これは、観光論が観光客個人の志向や欲求と結びつきやすく、志向や欲求から取り扱っていると考えられる。

■ 倫理

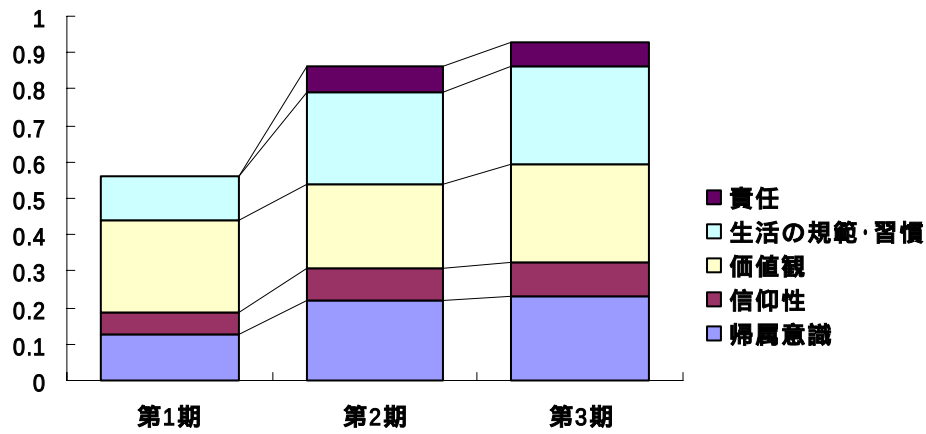


図 4.7 倫理における使用頻度の変遷

(1) 帰属意識

帰属意識に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、増加傾向にある。

(2) 信仰性

信仰性に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(3) 価値観

価値観に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(4) 生活の規範・習慣

生活の規範・習慣に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、増加傾向にある。

(5) 責任

責任に関する項目の使用頻度は、第 1 期にはその記述が見られなかったが、第 2 期、第 3 期における使用頻度は、大きな変化は見られず、安定している。

(6) 倫理に関する考察とまとめ

倫理において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

(a) 第 2 期からの責任の使用頻度の出現

(a) 第 2 期からの責任の使用頻度の出現

第 1 期において、責任の項目は見られない。つまり、観光論は、第 1 期において、その責任の所在が明らかではなく無秩序のまま観光がなされていたということがいえる。

■ 環境支援行動

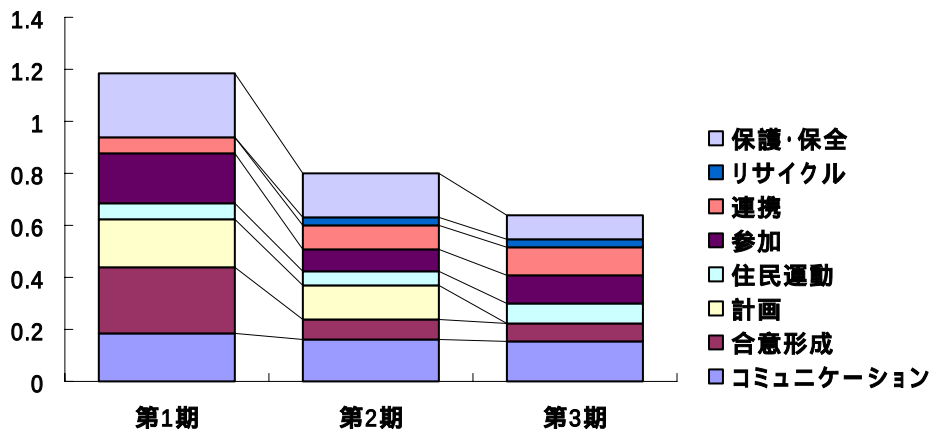


図 4.8 環境支援行動における使用頻度の変遷

(1) コミュニケーション

コミュニケーションに関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(2) 合意形成

合意形成に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅に減少している。しかし、3 期の使用頻度には、大きな変動はなく、安定している。

(3) 計画

計画に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大きな変化は見られない。しかし、第3期には、その記述が見られない。

(4) 住民運動

住民運動に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(5) 参加

参加に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅に減少している。しかし、第3期にはその値が増加している。

(6) 連携

連携に関する項目の使用頻度は、3 期を通じて、増加傾向にある。

(7) リサイクル

リサイクルに関する項目の使用頻度は、第1期にはその記述が見られなかったが、第2期、第3

期における使用頻度は、大きな変化は見られず、安定している。しかし、その値は全体的に低い。

(8) 保護・保全

保護・保全に関する項目の使用頻度は、第 1 期から第 2 期にかけて、わずかな減少であったものが、第 3 期には、大幅な減少となっている。

(9) 環境支援行動に関する考察とまとめ

環境支援行動において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

- (a) リサイクルおよび計画の不安定さ
- (b) コミュニケーションの安定度
- (c) 第 2 期における合意形成の使用頻度の減少

(a) リサイクルおよび計画の不安定さ

第 1 期におけるリサイクル、および第 3 期における計画において使用頻度が見られない。これは、観光論がリサイクルを第 2 期から取り扱い始め、計画については、第 3 期での取り扱いが困難であることを物語っている。

(b) コミュニケーションの安定度

コミュニケーションの使用頻度は 3 期を通じて安定した使用頻度を保っている。これは、観光論がコミュニケーションを扱いやすいと考えられる。

(c) 第 2 期における合意形成の使用頻度の減少

合意形成の使用頻度が第 2 期において激減し、第 3 期においても低いままである。これは、観光論が基本概念の場合と同じく、第 1 期において取り扱おうと試みたが、結果として取り扱えなかったため、ブームのような形になっている。

■ 要素特性

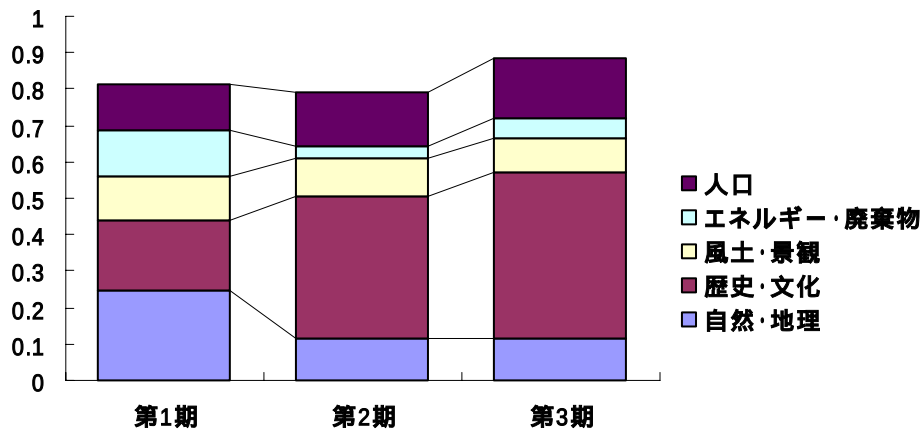


図 4.9 要素特性における使用頻度の変遷

(1) 自然・地理

自然・地理に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅な減少が見られる。しかし、第3期にかけては、変化が見られず、その値は安定している。

(2) 歴史・文化

歴史・文化に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅な増加が見られる。さらに、第3期にかけても、増加傾向が見られる。

(3) 風土・景観

風土・景観に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(4) エネルギー・廃棄物

エネルギー・廃棄物に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅に減少している。しかし、第3期にはその値がわずかながら、増加している。

(5) 人口

人口に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、わずかながら、増加傾向にある。

(6) 要素特性に関する考察とまとめ

要素特性において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

- (a) 歴史・文化の使用頻度の増加
- (b) 第2期におけるエネルギー・廃棄物の使用頻度の減少

(a) 歴史・文化の使用頻度の増加

歴史・文化は使用頻度が第2期、3期と時間を経過するにしたがって、極端にその使用頻度が増加している。これは、観光論が歴史や文化を重点的に取り扱っていることがわかる。

(b) 第2期におけるエネルギー・廃棄物の使用頻度の減少

エネルギー・廃棄物に関する項目の使用頻度が第2期において減少している。これは、観光論が第2期においては、エネルギー・廃棄物を取り扱わなかったことがわかる。

■ 権力性

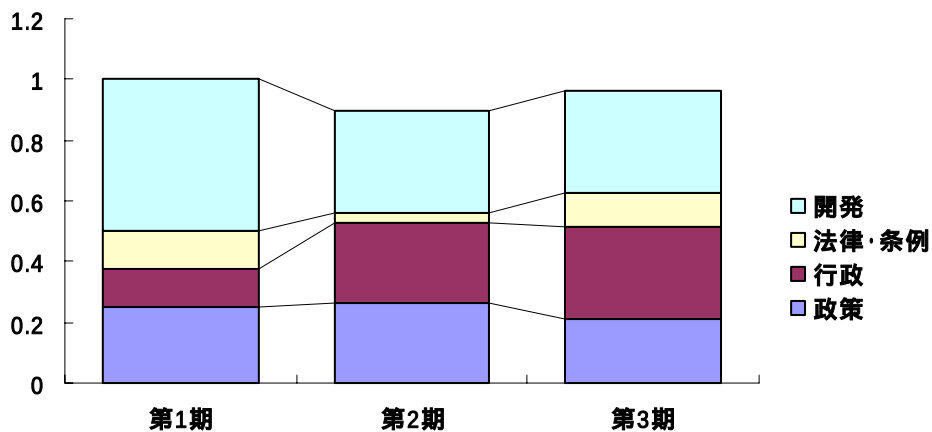


図 4.10 権力性における使用頻度の変遷

(1) 政策

政策に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな増加が見られる。しかし、第3期にかけて、使用頻度は減少している。

(2) 行政

行政に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、増加傾向が見られる。さらに、第3期にはその値がわずかだが、増加している。

(3) 法律・条例

法律・行政に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅に減少している。しかし、第3期にはその値がわずかだが、増加している。

(4) 開発

開発に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな減少が見られる。しかし、第3期にかけて、使用頻度は安定している。

(5) 権力性に関する考察とまとめ

権力性において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

- (a) 開発の使用頻度の高さ
- (b) 第2期における法律・条例の使用頻度の減少
- (c) 第2期における行政の使用頻度の増加

(a) 開発の使用頻度の高さ

開発の使用頻度は、第2期にやや減少するとはいえ、権力性の項目の中で最も高く、安定しているといえる。これは、観光論が開発と結びつきやすく、開発を取り扱ったといえる。

(b) 第2期における法律・条例の使用頻度の減少

法律・条例に関する項目の使用頻度が第2期において減少している。これは、観光論が第2期においては、法律・条例を取り扱わなかったことがわかる。

(c) 第2期における行政の使用頻度の増加

行政に関する項目の使用頻度が第2期、3期と時間を経過するにしたがって、使用頻度が増加している。これは、観光論が行政を重点的に取り扱っていることがわかる。

■ 資本性

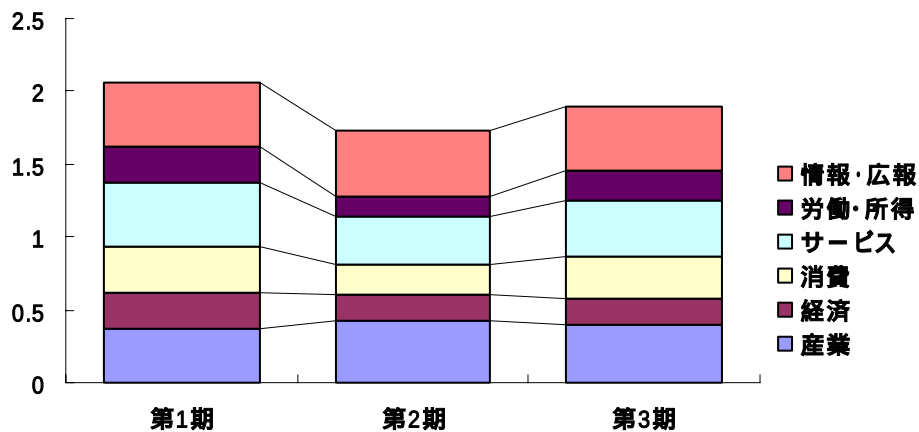


図 4.11 資本性における使用頻度の変遷

(1) 産業

産業の項目に関する使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな増加が見られる。しかし、第3期にかけて、使用頻度はわずかに減少している。

(2) 経済

経済に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(3) 消費

消費に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな減少が見られる。しかし、第3期にかけて、使用頻度はわずかに増加している。全体的には、大きな変化は見られず、安定している。

(4) サービス

サービスに関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな減少が見られる。しかし、第3期にかけて、使用頻度はわずかに増加している。全体的には、大きな変化は見られず、安定している。

(5) 労働・所得

労働・所得に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、わずかな減少が見られる。しかし、第3期にかけて、使用頻度はわずかに増加している。全体的には、大きな変化は見られず、安定している。

(6) 情報・広報

情報・広報に関する項目の使用頻度は、3期を通じて、大きな変化は見られず、安定している。

(7) 資本性に関する考察とまとめ

資本性において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

(a) 全項目の使用頻度の安定

(a) 全項目の使用頻度の安定

資本性に関する項目の使用頻度は、すべての項目において安定している上に、使用頻度も高い。これは、観光論が資本性に含まれる項目が3期を通じて、安定して取り扱っているといえる。

■ 公益享受性

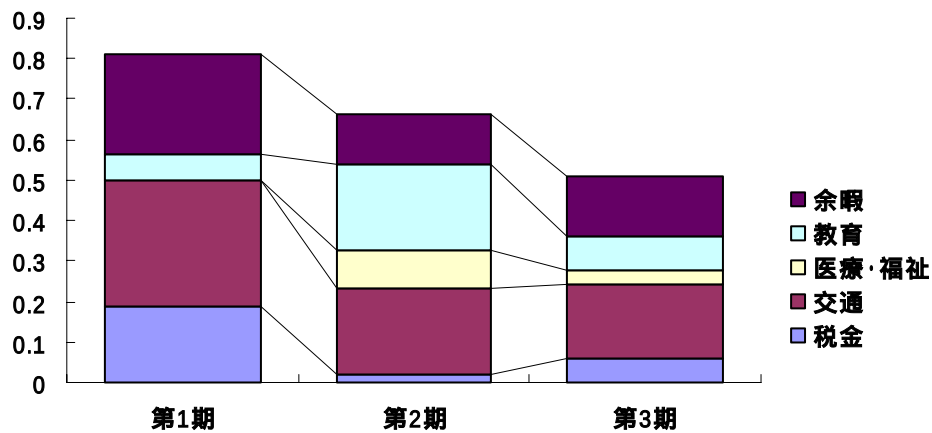


図 4.12 公益享受性における使用頻度の変遷

(1) 税金

税金に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅に減少している。しかし、第3期にはその値がわずかだが、増加している。

(2) 交通

交通に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、減少が見られる。しかし、第3期にかけて、使用頻度は、大きな変化もなく安定している。

(3) 医療・福祉

医療・福祉に関する項目の使用頻度は、第1期にはその記述が見られなかった。しかし、第2期から第3期にかけて、使用頻度は減少している。

(4) 教育

教育に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅な増加が見られる。しかし、第3期にかけて、大幅な減少傾向が見られる。

(5) 余暇

余暇に関する項目の使用頻度は、第1期から第2期にかけて、大幅に減少している。しかし、第3期にはその値がわずかだが、増加している。

(6) 公益享受性に関する考察とまとめ

公益享受性において、以下の点があげられ、これについて考察をおこなう。

- (a) 交通の使用頻度の安定度
- (b) 第 2 期における税金の使用頻度の減少
- (c) 第 2 期における教育および医療・福祉の使用頻度の増加

(a) 交通の使用頻度の安定度

交通の使用頻度は、3 期を通じて安定した使用頻度を保っている。これは、観光論が交通と相性がよかったと考えられる。

(b) 第 2 期における税金の使用頻度の減少

税金に関する項目の使用頻度が第 2 期において減少している。これは、観光論が第 2 期においては、税金を取り扱わなかったことがわかる。

(c) 第 2 期における教育および医療・福祉の使用頻度の増加

第 2 期において、項目の使用頻度が増加しているものとして、教育と医療・福祉があげられる。このことから、観光論は、第 2 期において教育を重点的に取り扱っているということがいえる。しかし、医療・福祉に関しては、第 1 期には使用頻度が見られないことから、第 2 期から取り扱っていることがわかる。

4-4 使用頻度による変遷のまとめ

4-4-1 基本概念の項目によるまとめ

全体的に基本概念は、第 2、3 期における極端な減少があげられた。そのなかで、循環性が安定して扱われており、続いて第 3 期において、自立性および、階層性使用頻度が増加している。

4-4-2 環境の身体性の項目によるまとめ

環境の身体性において、コミュニケーションと志向・欲求が 3 期を通じて使用頻度が高く、安定していたという。しかし、倫理の項目が全体的に増加傾向にあるなかで、第 1 期においてのみ責任とりサイクルが、第 3 期に計画の使用頻度が見られない。さらに、第 2 期において合意形成の使用頻度が激減している。

4-4-3 環境の空間性の項目によるまとめ

全体的に環境の空間性使用頻度は高く、なかでも、中分類である資本性に含まれる項目や、開発、交通といった項目が安定していた。さらに、歴史・文化は、使用頻度が時間を経過するに従っ

て大幅な増加していた。しかし、第 1 期においてのみ、医療・福祉の使用頻度が見られなかった。さらに、第 2 期において、エネルギー・廃棄物、法律・条例、税金、余暇といった項目に関する使用頻度が減少している。その反面、行政、教育に関する使用頻度が、この時期に増加している。

4-5 本章のまとめ

本章では、まず「掲載誌」と「年度」における数の変遷から、本研究における「観光論」全体の傾向を把握した。次に、「観光論」における「環境の概念」の変遷を把握するために、年代を三区区分した。続いて、項目における記述個数を各区分に所属する論文数で割ったものを使用頻度とし、統計的記述量に変換された使用頻度によって、変遷をおった。これをまとめると以下のような図にまとめることができる。

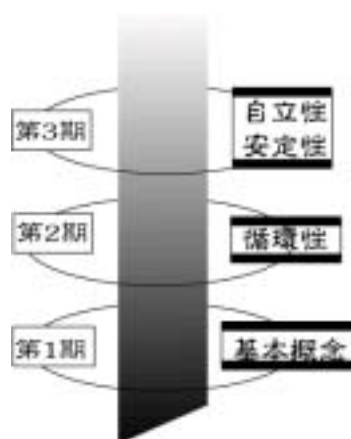


図 4.13 「基本概念」における項目の変遷

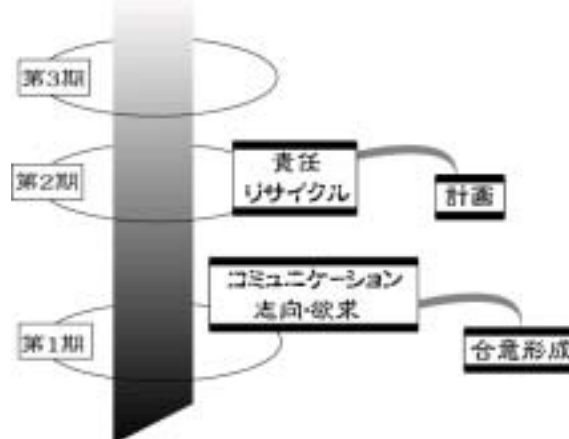


図 4.14 「環境の身体性」における項目の変遷

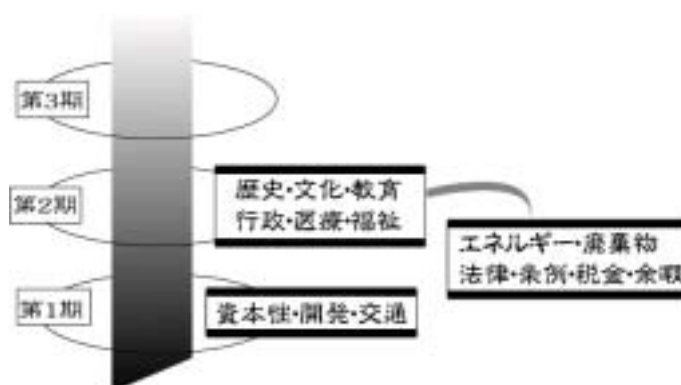


図 4.15 「環境の空間性」における項目の変遷